

詠 詠 今 古

八月号



花鳥諷詠

8月号 (365号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠



平成30年 8月 ■ 第365号 ————— 目次

| | |
|--------------|---------------|
| 花鳥諷詠選集 | 稲畑 汀子 2 |
| | 稲畑廣太郎 4 |

| | |
|----------------------|---|
| 第十五回国際俳句シンポジウム | 7 |
|----------------------|---|

| | |
|------------|---------------|
| 一頁の鑑賞..... | 鈴木しどみ16 |
| | 森脇 杏花17 |

| | |
|--------------|---------------|
| この人の作品 | たなか迪子18 |
|--------------|---------------|

| | |
|---------------|----|
| 賛助会員だより | 19 |
|---------------|----|

| | |
|----------|----|
| 風報 | 20 |
|----------|----|

| | |
|----------|----|
| 卯浪 | 23 |
|----------|----|

| | |
|-----------------|----|
| 地区行事開催日程表 | 27 |
|-----------------|----|

| | |
|------------|----|
| 編集後記 | 28 |
|------------|----|

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は
公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商
標です。

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

これよりの苦勞樂しみ菊根分

福山 佐藤 浩子

朝寝して豊かな一と日ありにけり

大牟田 山下 順子

崩れつつ息づいてゐる牡丹かな

高松 岩瀬 由美子

健康をとり戻したる汗涼し

福知山 松山 牧子

平成の残る日惜しみ春惜む

守口 加藤 ヒロ子

二句短評

一句目——菊の根分けをして育てて行く作者。植物を育てる難しさは、草や木も命があるからである。しっかりと手入れをして行かなければ枯らしてしまう。或いは菊の品評会に出すために育てていくのであろうか。それならば楽しみという措辞のなかに入賞という期待があつて、ますます仇や疎かには出来ない手入れである。二句目——朝寝をして健康な朝を迎えた作者が想像される。「豊かな一と日」ということで、豊かな健康に添う豊かな心で過ごした一日が想像される。

入選六十句

花は葉にちから蓄へ始めをり 高山 大下 雅子

薄墨の残花を散らす今朝の雨 半田 加藤 清美

春眠の夢の一齣地震に消ゆ 福山 世良 正子

山風に茅花流しの野の光る 町田 村井田貞子

遠き風遠き新樹に見えて過ぐ 松戸 高瀬 竟二

父と子に一つの母校松の芯 松江 森木 八潮

寝惜しみて語り合ふ宿明易し 香芝 芳林 淳子

機音の生まれれば冬の浪音に 川口 櫻井 松翠

一山に響く鐘の音のどけしや 吹田 綿谷千世子

満開の藤の花房揺れやまず 福知山 宮本美恵子

明るさの邪魔してゐたる朝寝かな 三田 吉村 玲子

思ひ出の父のハモニカ昭和の日 札幌 岩本 京子

黄水仙咲いて元氣のわいて来し 登別 中里 ユキ

起き伏しに夫を偲びて春惜しむ 霧島 古賀キクヨ

裏参道日かげにひそと母子草 大分 古屋伸くに子

衣更へてちよつと若さを取り戻す 久留米 橋本百合子
 子等去にてひとりの庭の緑の日 福岡 佐竹美輪子
 うぐひすや何と静かな陶の里 久留米 坂井 順子
 振り花父の忌日の近づきぬ 刈谷 境 雅代
 息までも森の若葉に染まりさう 桐生 山崎 恵子
 人は皆明日へと歩み春惜む 十日町 小川のおこ
 妣の年越え解かること更衣 西予 末光恵美子
 すぐそこに摘める野のあり蓬餅 石川 堀口 道子
 葉桜となりて静まる吉野山 市原 飯塚 咲子
 生くるもの育つものあり春の川 高松 永森ケイ子
 海光のまぶしき瀬戸の夕桜 総社 山川 恵子
 その奥に秘湯一軒山うつぎ 福岡 深瀬 直治
 俳人に一ト日短き日永かな 大阪 中本 宙
 散るものを散らし四月の雨上がる 伊賀 羽根 千恵
 一歩づつ春愁を捨てハイキング 高知 栗坂 海馬

森の樹々自己主張あり夏に入る 豊後高田 大波多美妃
 春愁を風に預けて来たる句座 芦屋 勝田 展子
 若楓象の小川にかげ映し 西宮 山際ヨネ子
 オホーツクの野焼は少し先のこと 北見 藤瀬 正美
 年寄の小粋な嘘や万愚節 江津 安田 心道
 帰りには脱いでしまひぬ祭下駄 横浜 秋吉芙佐子
 母の日に母語る母九十五 東京 柿崎 典子
 行春や過ぎゆくものの懐しく 金沢 小幡 道子
 百人の句心乗せて風光る 米子 前田 千
 偲ぶとは句に励むこと春の逝く 姫路 上原 康子
 手の甲の年は隠せず古茶淹るる 生駒 山口 廣世
 感動はうすれゆくものは葉に 宇部 植木 陽子
 自らへ贈る薔薇切る誕生日 始良 村岡多津女
 生徒らの明るき未来楠若葉 兵庫 今地千鶴子
 瑕瑾なき薔薇の渦にも宿る雨 佐賀 古庄たみ子

● 稲畑廣太郎 選

特選五句

続かざること松蟬らしく聴く

金沢辻

美智子

寒鯉の水動かさずうごきけり

熊本限部

輝子

群れる蝌蚪手足授かり群を解く

旭川斉藤

朝由

妻知らぬ国防色や更衣

神戸日下

徳一

つばくらにだけ見ゆる風触るる風

芦屋酒井

湧水

二句短評

一句目——松蟬は、小さい体に似合わず結構太い声で鳴く。そして日差があると一斉に鳴き出し、日が翳るとびたつと鳴き声が止むのも特徴ではないだろうか。そんな松蟬の生態を的確に写生するとともに、その声を心行くまで楽しんでる作者の姿が明るく感じられる。

二句目——池等にいる鯉は、冬以外には水の中を元氣良く泳ぎ回り、時には水面から空中へ勢いよくジャンプしたりするが、寒鯉となると、水の中でじっとして、冬眠しているようでさえあるが、それが水の中でゆったりと動く様子が見事に詠まれてる。鯉の大きさも感じる。

瘦せたいと言うて太る子若葉風 倉敷 安福 利平

葉桜の押し上げてゐる白鷺城 姫路 小林 智子

春落葉見すごせぬほど落ちし朝 東大阪 中田 豪起

ままごとのやうに新妻新茶汲む 神戸 小柴 智子

私もまた市井の一人更衣 宇佐 磯永喜八郎

美奇さんの笑顔の浮かぶ山法師 四國史 豊田みゆき

高原の風よ日差よチューリップ 福山 貝原 玲子

これよりは花に包まれるる順路 青森 七戸富美子

囀の中へ中へと行く山路 芦屋 小田 ひろ

今年から嫁の加はる薔薇の家 岩倉 村瀬みさを

母の日や一緒に飲まうワインでも 十日町 関口 智実

とりどりの色あればこそ薔薇真白 岡山 桜本 滋子

老の身の遅るるままに更衣 福山 植岡 義道

鎌倉に重ねし忌日花は葉に 神戸 池田雅かず

風ひたと止んで西日の窓となる 高松 岩瀬 良子

入選六十句

昭和の日はじめてパンダ見たあの日 成田 小川 笙力

墳丘のいよいよ円し春の風 熊本 井芹真一郎

君逝きしあとを急ぎて春の行く 相模原 木村 享史

春の闇友の匂ひの残る部屋 西東京 石黒 和

風揚がる水平線を抜け出して 西予 三瀬 教世

山藤の空になりたき高さかな 大牟田 木村美和子

風光る乗りたる人に自転車に 市川 抜井 諒一

主なき桜となりて彩薄し 南相馬 高野かつみ

大空が引つ張り上げる松の芯 総社 一安 泰子

機音の止まれれば冬の浪音に 川口 櫻井 松翠

一軸に夏めく部屋となりけり 名張 仁木 正子

藤房の長さが風を呼びにけり 稲敷 小林寿恵王

眠るまま貫はれて行く子猫かな 堺 内田 陽子

まだ慣れぬ水に旋回初燕 高松 もりおかともこ

枝折戸の音なく開く蝶の昼 下関 里村 閃児

移る世に飾る静けさ武者人形 高知 岩佐 とよ

先生はすみれ野に入りそれつきり 町田 渡辺 炳子

近道を案内せし悔い春の泥 大阪 田中 靖子

筍のなほ青天へこころざし 浜田 田中由紀子

長女にも二女にも男の子柏餅 西宮 宮本 露子

時ゆくは人逝くことよ花は葉に 高松 信里由美子

春愁を風に預けて来たる句座 芦屋 勝田 展子

母の日に母語る母九十五 東京 柿崎 典子

亀鳴くを待ちて八十路にさしかかる 福岡 津田 富子

歴史閉づローカル線に花吹雪 福山 箱田富久恵

人逝きて葉桜の影いよ濃く 熊本 力 幸子

入学児宝のやうにランドセル 福岡 三坂 一生

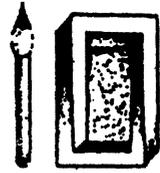
名を呼べば尻尾で応へ春の猫 阿南 田中 栄子

夏蝶や詩情一瞬舞ひ上がる 大牟田 石橋 武子

満開の花に吐息の流れ来る うきは 金子 清黙

夫とゐるだけの祝日ビール酌む 茅ヶ崎 中込 陽子
 元号に遠くなりゆく昭和の日 高松 藤岡 孝子
 瑕瑾なき薔薇の渦にも宿る雨 佐賀 古庄たみ子
 生かされて生きて遠のく昭和の日 北海道 伊林美恵子
 春陰の独りの音に踏む白砂 高松 池田 裕子
 軽梟の子の母の水輪を覗きをり 東京 大石つぎえ
 星乗せて天道虫の草の旅 高崎 清水 教子
 ふらここに一年生の列出来る 鹿児島 所崎 玲子
 沖よりの光直進して立夏 さぬき 原 道子
 太陽も包み込みたる袋掛 鹿児島 上間喜久子
 草笛や遠き月日を恋ふ音色 熊本 宅野 幸子
 たんぽぽや町の小径といふ小径 北海道 安田 豆作
 夏めくや青空行きの観覧車 芦屋 奥田 好子
 名画とは時におしやべり風薫る 福岡 浦本扶乃未
 山法師乗つてごらんよ次の風 尼崎 魚住富美子

初夏や少し重たきイヤリング ふじ野 清水 雪花
 万緑を来て万緑を見下ろせる 八尾 平澤 郁子
 これ以上開けぬほどにチューリップ 東京 荒井 桂子
 銀河系地球に囃す舟芝居 福岡 山城悠生紀
 雀の子風転がしてゆきにけり 南国 竹村あきを
 薔薇揺るる海風すこし足しながら 高松 久本 照代
 母の日や叱られし日の母の顔 倉敷 長代 美川
 緊張をとくごと薔薇の解けゆく 高松 荒井多美枝
 緑蔭に広がる空の欠片かな 横浜 工藤喜美子
 夏草や溺れてをりしローヒール 西予 濱永 宗一
 軽暖に客待つ心膨みぬ 金沢 中田 康子
 日本の音を奏でて祭笛 名古屋 山口 勝行
 笹の香に郷愁を解き粽解き 伊万里 大久保花舟
 そよ風に山を動かす若葉かな 埼玉 真篠みどり
 散り際の牡丹に風の華やげる 宇部 西村しげみ



編集後記

まだ書かぬ七夕色紙重ねあり

虚子

昭和二十六年八月七日

この時の虚子は七月いっぱいはいは山中湖に滞在し、その後鎌倉に帰っている。この句の添え書きには「子孫集まる」とあるので、孫の代くらいまでは集合したのだろう。こういう大家族主義というものは現今少なくなっているのか。お盆はともかく七夕くらいでいちいち集まることのない時代は淋しい。

今年の猛暑はまた異常な様相を呈しております。

これを書いている時点でもすでに各地で三十五度を超えており、先の西日本大雨とあわせて、確実な異常気象のようです。まだ残暑も長引きそうですので、各位におかれましてはくれぐれもご自愛いただきますようお願い申し上げます。

全国俳句大会の募集句が終了いたしました。現時点での投句数の報告はまじですが、ご投句いただきました皆様に厚く御礼を申し上げます。また、この選句は八月中旬あたりの締め切りとなり、その後集計が予定されておりますのでご期待ください。

先の総会におきましてもご報告申し上げますとおり、本年度の全国俳句大会は九月十五、十六日に愛媛県松山

市において開催されます。まだ当日のご参加には猶予がございますので、投句用紙に記載されておりました四国支部事務局宛にご連絡を賜りますようお願い申し上げます。(俊樹)

花鳥諷詠八月号(通巻第三六五号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

平成三十年八月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八一九

シャンブル笹塚二一B二〇一

電話 〇三三四五四五一九一

郵便振替 口座番号 〇〇二六〇七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一―一九二